

年間第二十五主日

2016.9.18

小宇佐敬二神父  
(東京カリタスの家 常務理事)

ルカ 16・1-13

わたしたちは誰もが、幸せになることを望んでいます。幸せになることを望んでいるのに、どういうわけだか不幸を引っ張り込んでしまう。これは、わたしたち人類にとっての根源的な問題と断言してもいいのかもしれませんが、そして、何が幸せなのか。何が不幸なのか。どうして不幸を引っ張り込んでしまうのか。それが、実は、罪の問題として取り上げられていくのかと思います。

長い救いの歴史の中で、何が幸せなのかということを明確に打ち出した預言者がいます。エリヤという預言者です。列王記上の17章から活躍を始め、そして列王記下の最初の方で火の車に乗って天に昇るといふ預言者です。アハブという王様の時代に活躍しましたが、このアハブの妃となるイザベルという女性、北のアッシリア王国の王女です。この王女は、輿入れのときに自分の神様を連れてきます。バアルとアシェラという夫婦神(めおとしん)です。この神々は豊穡神です。人間に豊かさを与える神々です。日本の中にも豊穡神がいますが、たいがいは夫婦神です。夫婦の神様がその国土に豊かな穀物や作物や、あるいは牛や羊を産み出していく。そのような意味が込められているのかと思います。そして、バアルとアシェラの預言者や祭司たち、彼らを養うために、イザベルは主の預言者や祭司たちを次々に虐殺し、そして最後にエリヤが立って、このバアルの預言者たちと戦うという、このとき、エリヤは人々に言います。「あなたたちは、いつまでどっちつかずに迷っているのか。もし主が神であるなら、主に従え。もしバアルが神であるなら、バアルに従え」(王上18・21)。バアルは先ほど申しました豊穡の神。豊かさや便利さや快適さを与えることによって、それを得ることによってわたしたちが幸せになっていくという、ひとつの幸せのイメージを代表する神です。主はかかわりの神。「わたしはあなたと共にいる」、このような神なのです。共にある、ということに幸せを見出していくのか、豊かさや快適な生活の中に幸せを見出していかうとするのか、いつまでどっちつかずに迷っているのか。それがエリヤの厳しい問いかけです。

イエス様も同じことを問いかけます。「だれも、二人の主人に仕えることはできない」(マタ 6・24、ルカ 16・18)。お金や物や食べ物や、その豊かさが、あるいは、地位や名誉やこの世界の物があなたがたの幸せの基となるものなのか。それとも、人と人とのかかわり、このかかわりを築き上げていく神と人と

のかかわり、その中にこそいのちがあり、その中にこそ幸せがあるのではないか。このことは、聖書全体のテーマとしてずっと問い続けられていることなのではないかと思います。

「不正な管理人のたとえ」を読んで、なんとなく腑に落ちないことがあります。なんでこの不正なやり方を主人は褒めたのだろう。なんでこの管理人が評価されてるのだろう。悪いことをしたのは悪いことに決まってるじゃないか。このことにたぶんひっかかっていくのではないかと思うのです。主人は、もちろん神様を象徴しているのですが、この主人にとっての宝物はなんであるのか。まずこのことに気づいておく必要があるかと思います。この主人にとっての宝物は、多くの畑や作物の実り、あるいは油や小麦などではなく、自分の手元にいる一人ひとりの小作人が主人にとっての宝物なのです。この、「主人にとっての宝物」を大事にしたこの管理人をだから主人は褒めているのです。こう見て取ると、なんとなくわかってくるような気がします。奇しくも、この管理人は主人と同じ宝物を共有した、ということになるのかと思います。そして、この、人と人とのかかわりこそが、油や小麦よりもよっぽど大事なものであるということに気が付いた。それを、主人は褒めているのではないのかなと思います。人と人とのかかわりを築き上げていく、この本当の宝物のために、この世の宝物、お金や地位や財産や、この世にしか置いていけない物、神様のもとに持って行くことができないもの、それは本当に大切な宝物のために用いる。ルカ福音書全体が、イエスの弟子であることと財産の使い方についてのテーマを貫いています。財産のことについての問題は、ルカが一番多く描いているかと思います。ザアカイの物語の中でも、このテーマが一つ浮かび上がってきています。

わたしたちにとって幸せとは何なのか。愛と信頼に満ちたかかわりを築き上げていくこと。そして、この、愛と信頼に満ちたかかわりを築き上げていくために、イエス様がわたしたちにくださった力、無条件の愛、愛する力を、ゆるしの力を、そして共感していく力をこの世ではぐくみ育て、大きな大きな力としていきながら、ひとつの愛する者たちの群れ、神様の宝の群れを築き上げていくこと、この教会、神の国を築き上げていくこと、そこに、わたしたちに託されている大きな使命があるのかと思います。このような、この世のどのような宝物と言われるものよりも、人と人との、わたしとあなたとの信頼に満ちたかかわりこそが何にも増しての宝物である。このことをしっかりと受けとめ合いながら、愛することを、ゆるすことを、共感することをもっともっと学び、わたしたちのいのちの力としてゆきたいと願います。